
Angel Beats ! Pararell ?

小心者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats! Parallel?

【Zコード】

Z3168Z

【作者名】

小心者

【あらすじ】

とある日、少年は突然死をむかえ、死後の世界でSUSUと天使の戦いに巻き込まれていく・・・。

前書きのよつなかの

前書き

どうも、小心者と申します。いまさらですが、初投稿で
いきなり、

Ange1 Beats! の一次創作をしてみました。すべてアニメ
を見終わったので

、そろそろ書こうかな、といつゝ気がしてましたが、まだ、Yuuuk
i!ノovel

でデジタルノベル版を書いている最中で、（もちろん、AB-の二
次創作です。）

平行しながら書いているので、更新が遅いかもしませんが、文章が
下手かもしだせんが、

暖かい日で見守っていただけたら、幸いです。

それでは、*Ange1 Beats! Parallel?* を楽しんで
ください。

ではでは・・・。

第1話 Memories? (前書き)

それでは、第1話を投稿したいと思います。

第1話 Memories?

僕は そんな価値しかない人間なのか ！

ふざけるな・・・。

ふざけるなああああああああ！！！！！

「はつ・・・！」

僕は急に目を開けた。いや、目覚めた、と言つていい。なぜなら、少し眠気が残つていたからである。初めに見えた景色は、薄暗い、夜の空だった。

ちょうど、夕方と、夜との境目の時のような、空である。僕は大の字になつて転がつていた。

辺りを見ようと体を起こす。そして、辺りを見回す。見覚えのない校舎、どうやら、ここは学校のようだ。そして、僕が今いる場所は、

グラウンドのようだつた。なぜ分かつたかといつと、白線のラインが大量にあつたから。それだけ。でも、僕の記憶には、ない場所だつた。でも・・・。

「・・・。」僕はここが、どこだか分かつてゐる気がした。なぜだか分からぬいけど。

「僕・・・。僕は・・・。」その先を言つのが怖かつた。でも、僕の記憶がたしかなら・・・。

「僕は 死んだのか・・・。」そのとき、フラッシュバックのよつて、記憶が蘇る。

僕はその日、学校に行くのがいやで、私服で街をブラブラしていた。何度か警官に声をかけられそうだったが、そのたびに、うまく巻いていた。

そして、大通りを歩いていたときだつた。突然冷たい痛みが脇腹に走つた。一瞬何が起きたか分からなかつた。横には、フードをかぶつた人が一人・・・、一人、血がついたナイフを持って立つていた。誰かが騒ぐ声が聞こえた。いや、周りの人が騒ぐ声だつた。なぜなら、僕が刺されたと言う事だから。急に力が抜けて、僕は道端に倒れた。

急に寒くなつてきた。視界もかすんで見えなくなつた。意識が消える前に聞いた最後の言葉は、「永遠に眠れ。」という言葉だつた。

「ハツ！」記憶のフラッシュバックが終わつて、僕はその場に座り込んだ。そう僕はあの日、見知らぬ人にいきなり刺されて、死んで、ここに来た。

「・・・。ウツ・・・。」すぐ泣きたくなつた。突然終わりを迎えた僕の人生。短い人生はあつという間に、過ぎて、自分が何をしたいのかすら見つけられずに死んで、

今、悔しいという気持ちだけが、僕を包んでいる。しばらく僕は声を上げずに泣いていた・・・。

しばらくしただろうか、僕は、泣くのを止めた。今更、終わつてしまつた事を考えて仕方がない。今、僕が何をするべきか考えるときだからだ。

今僕がすべきことは・・・。

「ここがどこか確かめる必要があるな・・・。」

僕はまず、校舎らしきところへ向かつた。

*

「はー・・・。」ため息をつきながら、俺、白石みのるは、ハンドガン

ワルサーPPKを片手に持ちながら考えていた。

理由は、十日前にさかのぼる。それは、あきら様が、富士山の泉を取つて来いと言つて、苦労して汲んできたあとのことだった。

あれから不幸が連續して起きるようになつていた。犬に用もないのに噛み付かれたり、追い掛け回されたり、仕事をあきら様に取られたり、拳句の果ては、クビにされて、事務所を追い出された。

こなたたちは毎日のように笑い話にされ、俺は笑いものにされていた。そして、ある日、工事現場の近くを通りかかったとき、突然視界が真っ暗になった。そして、気がついたら、ここにいた。そして、ゆりさん、ゆり隊長に連れられ、ここが死後の世界で、私たちは、天使とかいう少女と戦つていると聞かされ、

半ば強制的に、SSSとかいう部隊に入れられた。そして、五日前に、また俺のように新人が入ってきた。星野って言う美少女が入ってきたのである。彼女は、自分はロボットだと言い、どうしてここに来たのか分からぬとか言われ、必死にゆり隊長が

説明し、その子も部隊に入つたのである。ただ、その子もここがよく分かつていいらしく、迷子になつてしまつていた。そして今、俺が星野、星野ゆめみさんを探している最中だ。探しに行く前に、ゆり隊長から、「天使に万が一遭遇したときに使いなさい。」とハンドガンを渡されてはいるが、正直心細い。早く探して帰還しないと・・・。ん・・・?

ガサガサ・・・。草陰から、そんな音がして、誰かが飛び出してき

た。

「うわあああああー?」 どうせに PPK を音がした方向に向けた。
そこにいたのは・・・。

「あ、白石さん、こんばんわ。」「探しているゆめみさん本人だった。」「ゆ、ゆめみさんか・・・。よかつた。」

「どうかしたんですね？」

「 ちうですか・・・。でも・・・。」

「せこへ、どうかしたんですか？」

• ०

「え！？」 まずい。今は俺のハンドガンしか装備がない」とになる。こんな状態で天使なんかに会つた日には・・・。

「と、とりあえず戻りましょう!」そう言つたときだつた。目の前

「・・・！」 そう、あの天使だった。

卷之三

俺は、ゆめみさん的手を引っ張り、その場から逃げ出したのだった。

校舎に向かう途中、僕は妙な物を見つけた。

道端に黒光りする物が。
近寄つて見ると、それは・・・

「拳銃……！」そう、ガンブルーのオートマチック拳銃が1丁、落ちていたのである。

「何でこんなものか?」僕がそこふせぐと、そこから破裂音がした。一回ではない。何度も。

ジンが3個、ベルトにつけられていた。

「」とした。と、ここで僕が学生服を着ていることに気づいた。ここに来る前は私服だったのに。まあいいや。そして、僕は、音の

した方へと走った。

俺はさつきからPPKで撃つていいのだが、ことごとく弾かれる。（ハンドソニックと言ひらしい）俺たちは、少しずつ追い込まれていた。そして・・・。

「なっ！」行き止まりだった。校舎の前で俺たちは、立ち止まつてしまつた。

「ぐ、ぐそー」やけくそで連発してゐる。しかし、イジジとく弾かれ……。

カチッカチッ・・・。弾切れになつた。くそー、ここに来てからも、

不幸ばつかしだぜ。

天使は、ゆっくり俺たちに近づいてきた。もづ、終わりなのか・・・?
? そう思つたときだつた。

バン!一発の銃声が響いた。月が辺りを照らしたとき、一人の少年
が、銃を構えて立つていた。

ふう、危ない危ない。銃声がした方向に走つてみると、一人の少女
が2人組みの人たちに襲いかかろうとしていた。

僕はホルスターから拳銃を抜き、マガジンに弾が入つている事を確
認して、セーフティを解除した。そして、狙いを定めて、
少女に打ち込んだのである。しかし、弾はことごとく甲剣によつて
弾かれた。自慢じゃないが、ガスガンばかり弄つていたおかげで、
射撃に関しては少し自信を持つていた。

しかし、少女は易々と弾き返した。いつたいこの子は・・・?いや、
そんなことを考えている暇はない。今は、この2人を助けるのが先
決だ。

僕は少女に向かつて連射したが、全部弾かれた。しかし、時間を稼
ぐことはできた。

彼らに僕はこう言つた。「早く逃げろ!」と。そして、彼らは校舎
へと逃げ込み、僕もマガを使い切つてから逃げ込んだのだった。

「はあはあ・・・」
「怖かつたです・・・」
「・・・」

僕たちは校長室の前にいた。あれから、僕たちは、天使とやらから
逃げ切り、校長室の前に座り込んでいた。

「それにしても・・・」

「？」

「おまえ、よく天使に躊躇なく引き金を引いたな。す、いぜ……。」

「え？ 何で？ 襲われている人を助けるのは当然だけど。」

「そりやそうだけど……。普通は拳銃なんてないからな……。あつてもあんな風に攻撃をかわしながら撃つなんてできねえよ。」

「そうですか……。」

「そうだ、お前、戦線に入らないか？」

「え？ 戦線つて？」

「クラスSSS、通称死んだ世界戦線。さっきの少女……。天使と戦うために作られた戦線で、神に復讐するための組織なんだ。」「そこに入れと？」

「ああ。」

「……。」神に復讐するため……か。正直、よく分からない。まだ情報が少なすぎるし、それに、この人たちの情報を信じていいのかどうか……？

まだ、判断がつかない。

「少し、時間をくれ。」

「え？」

「まだ、考えがまとまらない。まとまつたら、又ここに来るから。1日考えさせてくれ。」

「ああ……。分かった。でも、早めに決めてくれ。」

「分かった。」

ぼくはそう言つと、寮へ戻ることにした。（銃は返しておいた。）でも、その前にちょっと寄り道。

武器庫

逃げる途中にこの部屋を見つけた。一瞬だからよくは見えなかつたけれど、武器が大量にしまつてあつた。

僕は、窓を割り（もちろんだれもいない）ことを確認して。）武器庫の中に入った。

そこは、あらゆる武器、弾薬、弾倉がたくさん並べてあった。僕は三つほど、銃を取り出した。

M P 5 K A 4、ワルサー P P、M 19 コンバットマグナムである。これだけあれば十分だろつ。

僕はその武器を手に、寮に戻つた。（寮の場所は校舎に行く途中で確認した。）

男子寮

僕は空き部屋を見つけると、鍵を開け、中に入った（もちろんピッキン^q（^q）^q）

鍵を掛け、持つてきた武器のマガジンに、弾が入っているのを確認した後、M 19

と P P を持つてもう一度武器庫へ行き、弾薬を運び込んだ。そして、

また部屋に戻り、

追加の武器と弾薬、マガジン、今まで集めた武器をベットの下の収納スペースに入れた。

そして、部屋に備え付けのバスルームでシャワーを浴びる^qことにした。

僕はシャワーを浴びながら、S U S に入る^qか考えていた。しかし、考えはまとまりず、

答えを出すのは、明日にすることにした。シャワーを浴びた後、着替えてベットで横になつてこいる時だった。

突然、ドアをノックする音が聞こえた。僕はハツとすると、急いで M 19 を取り出し、それを持ちながら、覗き穴から外を覗いた。そこには

天使が立っていた

。

第三話 M945 (前書き)

更新遅れています。そしてこれからも遅れます。

くそー！僕はそう言いたくなつた。目の前の扉を開ければ、天使が待つてゐる。しかし、窓から飛び降りるわけにもいかない。ここは4階なのだ。飛び降りれば只ではすまない。

「どうする・・・」

僕は決断を迫られた。僕は

飛び降りた。もちろん、持てるだけの武器、弾薬を持つて。けどやつぱり落ちた。

ドカン！

ものすごい衝撃とともに、僕は氣を失つてしまつた。

・・・。

「はつーー！」は・・・。見慣れたベットに、薬品の臭い。そう、ここは保健室だ。

だれかが、運んでくれたのだろうか・・・。そう思った矢先

「目が覚めた？」顔を上げると、他の生徒とは違う制服の少女がそこにいた。

「あ、は、はい。」

「そう、ならいいわ。唐突で悪いけど、あなた、入隊してくれないかしら。」

入隊・・・！昨日、白石って人から同じ言葉を聽いた。そうか、この人がゆりつて

人かもしれない。

「迷つてているなら、今日中でいいから、返事をちょうだい。」

僕の答えは

「入隊します。」

「へ？」

「昨日、白石つて人に誘われたので。彼はどうしているのですか？」
「白石君？彼なら今食堂前でジュース買つてるわよ。それよりもなんで白石君のことを？」

「彼にSSSに入らないかと誘われたんです。ちょうど、変な甲剣を着けた人に襲われていたところを助けたときには。」

「へえ、白石君もやるじやない、新人勧誘できたなんて。まあいいか。それよりも襲われたつて？」

「甲剣を着けた少女に襲われていたんです。昨日、校庭で。」

「白石君……あれほど天使には氣をつけろと言つたのに……。」

「天使？」

「あなたが言つていた甲剣を付けた少女のことよ。ここに生徒会長。」

「……。」

「まあ、詳しい話は校長室でしてあげる。今は、まあ、入隊してくれてありがとう。これからもよろしく。」

ゆりさんが手を差し出す僕はその手をとつた。

「あ、名前聞いてなかつた。あなた、名前は？」

「富内。」

「下は？」

「彩戸」

「富内彩戸くんね、ようこそ、死んだ世界戦線へ！」

そういうてゆりさんは僕を校長室へ案内した。ちなみに、なぜ入隊したかというと、ここなら、僕を受け入れてくれそだからだ。

生前の自分は、天涯孤独で、家族もない、友達と呼べるものもないなかつた。だから、うそでも、集団のなかに入れることができなかつたから。

そして、昨日、本物の銃を握つたから。助けるためとはいえ、な。ここなら、非現実的なことが起きそう、いや、すでに起きている。

他にもたくさん理由があるけど、主な理由はこんな感じだ。

しばらく廊下を歩いていると、校長室と書かれた部屋があつた。僕が入ろうとドアノブに手を伸ばす。

「待つて！」ゆりさんが叫んだ。

「ここに入るには、合言葉が必要よ、あなたは新人だから、知らなければ、そのドアに触ると、トラップが発動してあなたが吹き飛ばされるわよ。」

どうやら簡単に入れないのでなつていいようだ。

「これから出入りするときには、ドアの前で、神も仏も天使もなしと言いなさい。そうすればトラップは作動しないわ。」

神も仏も天使もなし……か。覚えておこう。

そして、ゆりさんが扉を開く。

「入りなさい。」

僕はそのドアをぐぐつた。

ぐぐつた先には、誰もいなかつた。

「あれ？おかしいな、どこ行つたのかしら田向君たちは……まあいいわ。とりあえず、ここに座つて。」

ゆりさんは僕をソファーのあるところまで誘導した。僕はだまつて腰掛ける。

「で、まずは、この世界のことからね。この世界は、死んだ人間が来る世界。つまり、死後の世界よ。」

死後の世界。聞きなれた言葉だが、それでもかなりショックを受けた。そんな僕にはかまわず、ゆりさんは

説明を続ける。

「ここには、学生時代がきちんと送れなかつた人たちが来るところなのだ。だから、自殺した人たちがこの世界には来れないの。貴方も、あまりいい思い出がないんじゃないでしょうか。」

たしかに、僕の学生生活は、いじめと、家族の失踪でかなり荒れていた。武器は常に持ち歩いてたし、イライラで調子を崩したこともあつた。

「はい・・・。」

「そして、この世界では、模範的な行為をすると、消えてしまうの。」

「消える・・・!?」

「そう。テストで満点を取つたり、規律を守つたりすると消える。だから、私たちSSSのメンバーは、好き勝手に行動してるの。あなたも、消えないように、模範的な行動はしないこと。」

「消えたら、どうなるんですか?」

「生まれ変わると思うわ。でも私はその場面を見たわけじゃないからなんともいえなあけど。」

僕はとても怖くなつた。何に生まれ変わるか分からぬ、そんな得たいの知れない恐怖が僕を包んでいた。

「安心しなさい。模範的な行為をしなければ消えないから。」

そんな僕を気遣つたのか、ゆりさんは、そんなことを言つた。

その後も、しばらく死後の世界のことにについてゆりさんに聞いた。

その後。

「まあ、こんなところね。天使の事に関しては、白石くんに聞きなさい。彼は、SSSでかなりの情報通だから。彼ならもっと詳しく教えてくれるわよ。」

「はい、分かりました。」

「いい返事ね、富内くん。さて、話は変わるけど、これからはＳＳで活動していくのに武器が必要よ。天使と戦つたり、時間稼ぎをしたりするときにね。そこで、あなたに渡したいものがあるの。」

「なんですか？」

「これよ

ゆりさんが出したのは、一丁の拳銃。

「これを僕に？」

「ええ。」

「これ、本物ですか？」

「気になるなら撃つてみなさい。」

僕は出された拳銃をしげしげと眺める。僕の記憶に間違いがなければ、この銃は、S&W PC M945である。僕が初めて買ったガスガンが

このモデルだつた。実銃では、45ACPを使いながら、380ACPほどまで反動を抑えたカスタムモデル。アメリカでもめつたに見られない

貴重なモデル。しかも、ステンレスシルバーだ。まんま僕が持っていたガスガンと同じである。

僕は拳銃を手に取ると、マガジンを抜き、弾がチャンバーに入つてないか確認した。マガジンには、45ACPが8発、きれいに収まつていた。

マガジンを入れ、セーフティを解除し、窓の外に銃を向ける。そして、スライドを引き、トリガーを引いた。

バン！乾いた音とともにもちろんリコイルが来る。反動を抑えているとはいえ、銃が上に跳ね上がった。

「うお！」僕はそう声を漏らした。そして、誰もいないグラウンドに着弾し、土煙が上がった。僕はそのまま8発を撃ちきった。

見事にスライドストップがかかり僕は銃をおろした。

「どう?」

「・・・」あまりの凄さに言葉が出なかつた。まさか、こいつをまた持つことができるなんて・・・。

「いい? 今日からはこれを携帯すること。あと、天使に出来くわしたら、助けを呼ぶか、余裕が出来たら、戦闘に参加すること。これだけ守つてもらえば、後は好きに行動していいわ。」

「分かりました。」

「じゃあ、次の集合は、明日の午後6時。場所はこの校長室だから。いいわね?」

僕は無言でうなづく。

「以上。」

僕はその言葉を聞いてから、扉の外に出た。

〔食堂前エントランス〕

「ふう・・・」僕は自動販売機でROOTSの微糖を買い、ゆっくりと飲んでいた。なぜかこここの自動販売機は、生前の世界の飲み物と同じ物があつた。ちなみにお金は、事務課でもらつたもの。「死後の世界か・・・」いまいち、僕には理解ができなかつた。でも、死んだという認識はある。でも、こういう死後の世界も悪くないな。特に、本物の銃を持つことができるなんて、夢にも思わなかつたからだ。

「さてと、行きますか。」僕はいつたん寮に戻ることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3168n/>

Angel Beats! Parallel?

2011年10月7日12時35分発行